平成29年4月作成版

戸山流の形

戸山流居合抜刀道連盟

戸山流居合抜刀道連盟・戸山流の形の沿革

現在、戸山流居合抜刀道連盟において伝承している戸山流の形は、旧日本陸軍戸山学校において刀戦の実態経験と、各流古武道刀法を取り入れて作成した軍刀操法の七本の形が原形となっている。

第二次世界大戦・終戦後ほどなく戸山流抜刀術を後世に伝承するため、北海道の山口勇喜先生の大日本戸山流居合道連盟、関西の森永清先生の大日本戸山流居合道協会、それに徳冨太三郎・中村泰三郎両先生の戸山流振興会が主たる団体として発足した。

中村泰三郎先生は、戸山流振興会を全日本戸山流居合道連盟と改称し、戸山流の形を制定するにあたり、軍刀操法を継承しつつも、軍刀操法の左足から踏み出す方式を古流居合と同じく右足から踏み出す方式に変えるとともに、血振りの所作を加え、更に、七本の形に「据物斬り」を加えた八本の形を制定した。その後、連盟の呼称や体制に幾多の変遷があり、平成２８年から現在の連盟の呼称と体制となり、戸山流居合抜刀道連盟の指導の下に戸山流の形が継承されている。

基本的な所作

1　居合腰

両足を概ね肩幅に開き、軽く両膝を折り腰を落とし、丹田に気を落とし重心を身体の中心に置く。この時、両肩の力を抜き、両腕は軽く肘を曲げ両手を大腿部の上部に添え、背筋を伸ばして顎を軽く引き、両眼は半眼気に遠方を望み、気を前後左右に配る。

2　居合腰から抜刀の姿勢

居合腰の姿勢から、右足を一歩前方に出し右膝を右足爪先の垂直上まで曲げる。この時、左足は後膝部を伸ばし気味にして踵を若干浮かせる。

3　抜刀

抜刀の姿勢になりながら、両手を下から持ち上げるようにして、左手で鞘の鯉口を握り、親指で鯉口を切ると同時に右手で柄の棟部分から握り抜刀する。
抜刀する際、鞘鳴りをさせないようにするとともに、約切先 10 ㎝まで抜いた時に鯉口を持った左手を帯に沿って鞘引きを行う。

4　構えの姿勢

⑴　中段（正眼）の構え

抜刀の姿勢で、切先を正面に向ける。この時、両肘は軽く曲げ、柄頭は臍から拳一つから二つ前の位置、切先は喉元の高さ（延長線上に敵の目の位置）に置く。

⑵　上段の構え

抜刀の姿勢から刀を頭上に振り被る。（右足が前の時が右上段、左足が前の時が左上段）

この時、振り被った刀の角度は30度から概ね45度で、柄頭は額の上方拳一つの位置に置く。

5　血振り

中段（正眼）の構えから、右手で刀を把持し胸を張るように両腕を左右に振り開く。この時、右拳は肩と腰の中間の高さにし、切先を体側線上に置き、概ね45度の角度で肩から切先まで弧を描くようにする。また、左手は左体側の帯に置く。

6　納刀

血振りの姿勢から、左手で栗型を探りながら鯉口を握り、縦納刀（原則として）する。納刀の際に鞘鳴りさせないようにし、鎺元約10㎝まで納刀した時点で左足を引き付けながら居合腰の姿勢に戻ると同時に納刀し終わり、柄改めを行う。

戸山流形　一本目（正面の敵）

1　想定

正面に居る敵が殺気を持って刀の柄に手を掛けたので、抜き打ち逆袈裟斬りで、敵の右上腕を斬り付け、敵が下がるところを追い込み、敵を左袈裟で斬り下げる。

2　所作

①　居合腰の姿勢から、右足を踏みしながら抜刀の態勢となる。
②　左足を踏み出すと同時に、片手抜き打ちで左逆袈裟に斬り上げる。
③　右足を踏み出しながら、諸手右上段の構えから左袈裟を斬り下げる。
④　右足から一足分送り足で、中段に構えて残心を示す。
⑤　血振り、納刀の後、左足から下がり元の位置に戻り居合腰の姿勢となる。

3　留意点

☆　②の時、切先約 10 ㎝までは柄頭を敵に向けて抜刀し、素早く鞘引きをし、切先が鞘離れしたところから刃を返して斬り上げる。斬り上げた切先は、概ね頭の高さで止め、かつ、体側線から外れない位置で止めること。
☆　②から③に移るときは、斬り上げた切先の下に身体を入れるように移動し、切先を最短距離で上段の構えにしながら諸手で柄を握る。
☆　③の時、斬り下げた切先は、膝の高さで止め、かつ、体側線から外れない位置で止めること。

戸山流形　二本目（右方の敵）

1　想定

右方に居る敵が殺気を持って刀の柄に手を掛けたので、抜き打ち水平斬りで敵の右上腕を斬り付け、敵が下がるところを追い込み右袈裟を斬り下げる。

2　所作

①　居合腰の姿勢から、右足を踏み出した時に右方の敵に目付をする。
②　左足の爪先を、右足の前に踏み出しながら抜刀の態勢となる。
③　右方に身体を向けながら抜刀を始め、敵方向に右足を踏み出すと同時に片手抜き打ちで水平に斬る。
④　左足を踏み出しながら、諸手左上段の構えとなり右袈裟を斬り下げる。
⑤　右足を踏み出しながら、中段に構え残心を示す。
⑥　血振り、納刀の後、左足から下がり元の位置に戻り居合腰の姿勢となる。

3　留意点

☆　二本目の所作に入る際に、左 90 度に方向変換し、二歩下がった位置で基本の姿勢をとる。
☆　③の時、切先約 10 ㎝までは柄頭を敵に向けながら抜刀し、鞘引きをして切先が鞘離れしたところから刃を返して、水平に敵の上腕を斬る。斬り付けた切先は体側線から外れない位置で止めること。
☆　③から④に移る時は、切先を最短距離で上段の構えにしながら諸手で柄を握る。
☆　④の時、斬り下げた切先は、膝の高さで止め、かつ、体側線から外れない位置で止めること。

戸山流形　三本目（左方の敵）

1　想定

左方の敵が突如抜刀して襲って来たので、抜刀し片手平突きで敵の水月を刺すが、尚も上段から打ち込んでくる敵の刀を、頭上で受け流して左袈裟に斬り下げる。

2　所作

① 居合腰の姿勢から、右足を踏み出しながら左方の敵に目付をして、更に左足を踏み出しながら抜刀の態勢となる。
② 右足を、右斜め前方(概ね 45 度)に踏み出しながら、右横方向へ水平に抜刀する。
③ 腰を左の敵方向に回転させながら片手平突きをしたのち引き抜く。
④ 打ち込んでくる敵の刀に対し、頭上で片手受けの姿勢となり、受け流しながら左足を後方に引き、切先を後方に回して諸手右上段から左袈裟を斬り下げる。
⑤ 右足から一足分送り足で、中段に構え残心を示す。
⑥ 血振り、納刀の後、元の位置に戻り居合腰の姿勢となる。

3　留意点

☆ 三本目の所作に入る際に、右 90 度に方向変換し二歩下がった位置での居合腰姿勢をとる。
☆ ②の時、鯉口を右に向けるように抜刀し、鎬を上に棟を身体に付けるように構え、剣線を敵に向けた姿勢となる。
☆ ③の時、腰の回転を利用して刀を水平に突き出し、３分の力で突き、７分の力で引き抜く。
☆ ④の時、引き抜いた刀の切先から拳を上方に突き上げるように持ち上げ、頭上で鎬を上にして切先を水平よりやや下げ、鎺元で敵の刀を受け、その後、受け流しながら左足を下げて諸手上段の姿勢となる。

戸山流形　四本目（後方の敵）

1　想定

後方から攻撃してくる敵の殺気を感じ、振り向きながら抜刀し、敵の一撃を下がりながら躱して右袈裟を斬り、尚も斬り掛かって来る敵を更に下がりながら躱し左袈裟に斬り下げる。

2　所作

① 居合腰の姿勢から、右足を踏み出しながら後方の敵に目付をして抜刀の態勢となる。
② 左足を右足の前に踏み出し、身体を 180 度右回転させながら抜刀して片手上段となり、右足を下げて態勢を後方に躱し、敵の右袈裟を斬り下げる。
③ 左足を下げて更に態勢を後方に躱しながら、両手を大きく後方に回し諸手右上段となり、敵の左袈裟を斬り下げる。
④ 右足から一足分送り足で、中段に構え残心を示す。
⑤ 血振り、納刀の後、元の位置に戻り居合腰の姿勢となる。

3　留意点

☆ 四本目の所作に入る際に、元の位置から三歩進み、回れ右の要領で方向変換して居合腰の姿勢をとる。
☆ ②の時、柄頭を上方に向けながら抜刀し、切先が鞘離れしたところで刀をその位置に残しごころにして身体を右回転させ片手上段となり、右袈裟を斬り下げた切先は膝の高さで体側線から外れない位置で一旦止める。
☆ ②から③に移行する時は、両手を左右に開き下から上方へ円を描くようにして回しながら諸手右上段の姿勢になる。
☆ ③の時、斬り下げた切先は膝の高さで体側線から外れないこと。

戸山流形　五本目（前方複数の敵）

1　想定

前方の複数の敵に突撃し、左右の袈裟を連続に斬り下げる。

2　所作

①　居合腰の姿勢のまま抜刀し、片手上段の態勢となる。
②　右足から踏み出し、前進しながら諸手上段の構えになり、右足を踏み出して一人目の敵の左袈裟を斬り下げる。
③　切先を左後方に回し、捲り上げながら左足を踏み出し諸手上段の構えとなり、二人目の敵の右袈裟を斬り下げる。
④　切先を右後方に回し、捲り上げながら右足を踏み出し諸手上段の構えとなり、三人目の敵の左袈裟を斬り下げる。
⑤　右足から一足分送り足で、中段に構え残心を示す。
⑥　血振り、納刀の後、左足から下がり元の位置に戻り居合腰の姿勢となる。

3　留意点

☆　①の抜刀し片手上段の態勢の時、左手は鯉口を握ったままとする。
☆　②③④の時、斬り下げた切先は、膝の高さで体側線から外れない位置で一旦止めること。刀を後方に捲り上げる時に上半身を左右に振らないようにすること。

戸山流形　六本目（前後の敵）

1　想定

前後二人の敵に対処するため、前方の敵に肉薄中、後方に居た敵が先に上段から真直に斬り掛かって来たので、振り向いて後方の敵の刀を受け流して左袈裟を斬り下げ、直ちに態勢を前方の敵に正対させ真っ向に斬り下げる。

2　所作

① 居合腰の姿勢から右足を踏み出しながら、後方の敵に目付をして抜刀の態勢となる。
② 左足の爪先を外側(概ね 45 度)に開いて右足の前に踏み出しながら前方に抜刀し、右足を左足の前に踏み出しながら身体を 180 度左回転させ、後方に向きながら刀を切先から持ち上げ、頭上で片手受けの姿勢となる。
③ 後方の敵の刀を受け流しながら、左足を引いて右足の後方に交差させて、切先を左に回して諸手上段の姿勢から左袈裟を斬り下げる。
④ 前方の敵に目付をして、身体を左回転させ前方の敵に正対して、諸手上段の姿勢から真っ向に斬り下げる。
⑤ 右足を踏み出しながら、中段に構え残心を示す。
⑥ 血振り、納刀の後、左足から下がり元の位置に戻り居合腰の姿勢となる。

3　留意点

☆ ②の時、抜刀した切先は後方の敵に剣線を向け、拳を上方に突き上げるように切先から持ち上げ、頭上で鎬を上にして切先を水平よりやや下げ、鎺元で敵の刀を受ける。左手は鯉口を確り握っておくこと。
☆ ③から④に移行する時、左袈裟に斬り下げた切先を残し置きごころに身体を回転させながら上段に振り被る。動作は連続かつ迅速に行う。

戸山流形　七本目（三人の敵）

1　想定

右斜め前方(概ね 45 度)、正面、左斜め前方(概ね 45 度)の三人の敵に対し、右斜め前方の敵を片手上段の構えから右袈裟に斬り、左斜め前方の敵を諸手上段の構えから左袈裟に斬って、更に正面の敵を中段（正眼）に構えて水月を諸手突きに刺す。

2　所作

① 居合腰の姿勢から、右足を踏み出しながら右斜め前方の敵に目付をして、抜刀の態勢となる。

② 左足を踏み出しながら抜刀し、上半身を右斜め前(概ね 45 度)に向け、片手上段の構えから敵の右袈裟を斬り下げる。

③ 左斜め前方の敵に目付をし、右足を踏み出しながら、上半身を左斜め前(概ね 45 度)に向けると同時に、切先を後方に回しながら諸手上段の構えとなり、敵の左袈裟を斬り下げる。

④ 正面の敵に目付をして、上半身を正面に向けながら中段（正眼）の構えとなり、送り足で一歩踏み込んで敵の水月を諸手突きした後、左足から一歩引いて刀を引き抜く。

⑤ 左足を踏み出し左上段に構え残心した後、左足を下げながら中段に構える。

⑥ 血振り、納刀の後、左足から下がり元の位置に戻り居合腰の姿勢となる。

3　留意点

☆ ②から③に移る時、右袈裟に斬り下げた切先を残し置きごころに右足を出しながら両手を広げ、後方から振り被って諸手上段の構えとなる。

☆ 足の運びは常に正面を向いていること。

☆ ④の突きは、腰から押し出すように突き出し、突きを３分、引き抜き７分の力で、体勢が前のめりにならないようにすること。

戸山流形　八本目（据物斬り）

1　想定

日本刀の斬れ味を試すことを目的として、台上に置かれた標的を上段から真っ向に斬り下げる据物斬りの基本となる動きを習得するもの。

2　所作

① 居合腰の姿勢から、右足を半歩右横に踏み出しながら右横方向に抜刀し、刀を標的と平行に保つ。
② 諸手で上段に振り被り、真っ向に斬り下げる。
③ 足を開いたままで中段に構えて残心を示す。
④ 血振りの後、納刀するが、鎺元約 10 ㎝まで納刀した時点で右足を引き付けながら居合腰の姿勢に戻る。

3　留意点

☆ ①から②に移る時、切先を顔の左横を通して後方を突くようにしながら諸手で上段に振り被る。この時、振り被った切先が下がらないようにする。
☆ ②の時、斬り下げながら腰を落とし、柄頭を臍前に、切先は水平よりやや下がった高さ約 30 ㎝で止める。
☆ ②から③に移る時、切先を上げながら落とした腰を元の高さまで戻す。

● 平成 29 年 2 月 4 日の改正点

1 「基本の姿勢」を「居合腰」に変更

2 長さの単位を「寸」から「㎝」に変更

3 ３本目の突きの位置を「心臓」から「水月」に変更

4 ７本目の突きの位置を「喉元」から「水月」に変更

5 ３本目及び７本目の留意点中、突きの力を「突き４分、引き６分」を「突き３分、引き７分」に変更

6 ６本目の動作の②

「左足の爪先を外側(概ね 45 度)に開いて踏み出しながら前方に抜刀し、右足を左足の外側に踏み出しながら身体を 180 度左回転させ、刀を切先から持ち上げ、頭上で片手受けの姿勢となる」

を

「左足の爪先を外側(概ね 45 度)に開いて右足の前に踏み出しながら前方に抜刀し、右足を左足の前に踏み出しながら身体を 180 度左回転させ、後方に向きながら刀を切先から持ち上げ、頭上で片手受けの姿勢となる」

に変更

7 ８本目の動作の①

「右足を半歩右横に踏み出しながら右横方向に抜刀する。」

を

「右足を半歩右横に踏み出しながら右横方向に抜刀し、刀を標的と平行に保つ。」

に変更

8 ８本目の留意点の

「②の時、斬り下げながら腰を落とし、柄頭を臍前に、切先は水平よりやや下がった位置で止める。」

を

「②の時、斬り下げながら腰を落とし、柄頭を臍前に、切先は水平よりやや下がった高さ約 30 ㎝で止める。」

に変更